

「よむ」を問い直す

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

1. はじめに

本稿は、2020年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2021年1月12日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(田中裕子氏:アクティブ・ブック・ダイアログ®認定ファシリテーター)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である原田青空さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

2. ゲストティーチャーの話

(1) 自己紹介

【ゲスト】田中裕子と申します。私は松本市職員の栄養士として、学校給食課で食物アレルギー対応食の献立作成および提供を担当しています。

私がアクティブ・ブック・ダイアログ(ABD)に出会ったのは、2018年の公務員の勉強会です。それを通してどうしても叶えたい夢があるため、認定ファシリテーターになり、その手段としてABDの講師をしています。

(2) アクティブ・ブック・ダイアログ(ABD)

【ゲスト】アクティブ・ブック・ダイア

ログ(ABD)とは、竹ノ内壮太郎さんによって開発された読書手法です。読書が苦手な人も本が好きな人も、短時間で読みたい本を読むことができる点が魅力の1つです。一冊の本を分担して読んでまとめる、発表し共有する、気づきを深める、対話をするというプロセスを通して、筆者の考えをより深く理解することができ、能動的な気づきや学びを得ることができます。また担当のページが少ないので手軽に本を読めるというメリットがあります。

(3) ABDの魅力

【ゲスト】ABDの魅力は、まず短時間で読書が可能な点です。長くても10ページから15ページずつ分担して読んでいきます。

分担していただいた箇所は要約していただくので、皆で共有する要約文も記録として残ります。そして、非常に集中して文章を読み、対話をするので、本の内容が深く記憶に定着します。また、深い気づきと創発が生まれます。ABDは本を読むことが主ではありますが、最終的な目的は対話をすることです。それに加え、集中力、要約力、発表力、コミュニケーション力、対話力など、今の時代に必要なリーダーシップを同時に磨くことができ、個人の多面的な成長が期待できます。また、同じメンバーで同じ本を読むため、同じレベルの知識を共有することができます、共通言語を作ることができます。

そして、本が一冊あることで仲間との対話の場を作ることができるため、楽しく気軽にコミュニティを作ることができます。

(4) ABDを進める手順

【ゲスト】実際にどのようにABDを進めていくのかを説明します。

まずは、本を選ぶことから始まります。この本の選び方には、気になった本で行う「本起点」と、その場に集まる人たちの課題解決につなげるために行う「目的起点」の2種類があります。対面でABDを行う際は、一冊の本をビリビリに破いて分担することもあります。

次に、担当パートごとに要約文を作っていきます。B5用紙5枚ぐらいを目安に作成していきます。要約文の製作が終わると担当パートを繋ぎ合わせて、限られた時間の中でリレープレゼンを行っていきます。オンラインで行う時はスライドを作り、画面共有をしながら発表するようにしています。

発表を聞いた後に「ギャラリーウォーク」という時間を取り、各パートのキーワードなどを確認します。

そして、最も重要なのは、ダイアログ（対話）です。ダイアログは発表すること、また他者の発表を通じて生まれた問いや心に響いた言葉を起点として対話をします。

(5) サマリーの製作のポイント

【ゲスト】まずは自分が共感したところを中心にまとめてもらいます。ここで注意していただきたいのは、「自分の考えや感想は入れない」、「作者の言葉をそのまま使う」ということです。そうでないと、作者の本当の言葉を味わうことができません。

そして、紙を大きく使って、5行程度に要約してください。また伝わりやすいように矢印、色などの工夫していただきたいのですが、イラストは入れないようにしてください。名前の記入も忘れずをお願いします。

(6) ABDの実践

【ゲスト】それでは、藤原和博『10年後、君に仕事はあるのか?——未来を生きるための「雇われる力」』（ダイヤモンド社、2017年）を題材にして、実際にABDに取り組みましょう。

【学生】現代の若者の最大の悩みとして「モデルとなる大人が近くにいない」ということが書かれていました。逆に保護者にとっては、自分の子は明らかに自分とは違う人生を歩む世の中になっていくことが考えら

れます。そして、若者世代の親と違う人生として、2つの例が書かれていました。

1つ目は、多くの親が体験した「標準的な人生モデル」を追求できないことです。例えば、「会社で正社員になれない」、「一生同じ会社で働けない」、「マイホームを持つのか分からない」といったことが挙げられています。2つ目は、「スマホとそれにつながったネット社会の広がり」です。

【学生】若者は「人生の半分をネット上で暮らすことになる」ということが書かれていました。そして自分の存在の半分はネットの中で広がりを持ちながら、他人とつながりを持つようになります。またその存在を評価されることで、自分の居場所が確保される感覚を得ることになります。

【学生】若者と親世代の違いとして、若者は「便利なコンビニ社会」に生まれ、時間を持って余すため、スポーツ、文化、芸術が花開く可能性が高いということが書かれていました。またIT化が進み、AIロボットが仕事を奪う世の中になっていきます。これらを踏まえて、不確かな時代を生き抜かなければならない君たちはどんなチカラを身に付けておくべきなのかという問いが投げかけられていました。

【学生】今後10年間で自分に最も影響を与える変化について書かれていました。特に世界的にはスマートフォンによって50億人もの人と、言葉の壁を越えて交流が可能になり、そのネットワークに人工知能がつながることが考えられます。その人工知能というのも人型のロボットに限らず、将来

的にはスマートフォンも「通信クン」と呼べるほど、優秀なロボットになるのではないかと書かれていました。

【学生】今後10年間の変化は「ネット内」で起こると書かれていました。親世代と若者世代を比較すると、親世代は建物が大型化する社会の中で、それに伴い物や街の外見上に夢を抱くことができました。しかし若者世代は建設がネット内で起こり、変化が可視化されないため夢を託しにくくなります。そのため夢の在り方も変わっていきます。

【学生】AIとロボットが仕事を奪うというより、世界の半分がネット内に建設され、人間がその世界で人生の半分を過ごすようになり、それによって仕事が凝縮されます。これが親世代と若者世代の決定的な違いです。そしてこのようにネットワークが広がり、AIが高度化するほど、人間はより人間らしくなります。なぜなら人間は人間にしかできない仕事をし、人間本来の知恵と力が生きてくるからです。

【学生】今後10年でかなり複雑な判断が求められるようになり、仕事までAIとロボットに奪われことになります。しかし予測が難しい事態に対応する仕事は残ります。新しいタイプの人間の仕事の場（フロンティア）を拓いていこうと書かれていました。

【学生】AIとロボットの時代において、電車の運転手と車掌で比べると、車掌の方が生き残ることが書かれていました。想定外の事態への対応は人間に任せた方が

うまくいきます。「AI×ロボット技術」と「人間の知恵」が掛け合わさる場所に、「フロンティア」が開けてきます。

【学生】2020年代から事務系の仕事の減少と東京五輪開催後の景気の悪化に伴い、就職活動の「地殻変動」が起こるのではないかと書かれていました。地方に多様な人材と知恵が集まることによって、地方の活性化が図られます。

【学生】先程の「地殻変動」に強いのは、観光とプログラミングであると書かれていました。観光に関しては、インバウンドが増え続けると予想され、プログラミングを理解しているかどうかは、2020年代にはかつての「英語ができるかどうか」と同じ意味を持つことになるからです。また2020年代には、社会に対する若者の負担が増えてしまうことが書かれていました。その理由はお年寄りが増え若者が減り、社会保障が破綻し、そして消費税が15%になると予想されるからです。

【学生】子どもの頃から前半戦の人生が決定づけられている人は全体の1%か多くても10%に満たないと書かれていました。子どもはみな大きな夢を持つべきだ、そしてその夢に向かってまっすぐに生きるのが良いと決めつける大人もいます。しかし本当にそうなのか、と筆者は問いかけていました。また選択の幅が広がるように基礎学力を高めることは必須であると述べられていました。

【学生】これからの時代に必要な「生きるチ

カラ」の三角形として、「情報処理力：1人で、早く正確に処理できる力」、「情報編集力：正解がないか、1つではない問題を解決する力」、「基礎的人間力：経験の積み重ねで育まれる力」が挙げられ、この3つの大切さが述べられていました。

【学生】この部分では、「学力がなくても上手にググれるか」ということが主題となっており、ググるキーワードやイメージは基礎学力がないとできません。何かの問題に対して、情報処理力は7割、情報編集力は3割必要だとされています。

【学生】たいていの仕事では「処理」的な部分が7割以上で、こうした処理仕事を早く正確にこなせることが仕事のできる人の必要条件です。あとの3割は「正解」が1つではない課題に対してどんなアプローチができるか、どれだけ納得できる解を導けるかといったことが仕事のできる人の必要条件であると述べられていました。

(7) 質疑応答

【学生】ABDを行う際、意見の食い違いが出た場合はどうするのでしょうか。

【ゲスト】改めて対話について考えていきます。「対話」とは、話し合いの在り方です。会話（日常の出来事や気分、噂話などの共有）、討議（主張と根拠の明示。批判や反論による意思決定）、議論（意思決定に必要な情報共有。優先順位付け）の3つに対して、対話は「目的や意味、価値観の共有」です。「対話」と「議論や討論」の決定的な違いは、

「聴くこと」が対話に入っているということです。意見の食い違いがあつて当たり前の中で、お互いに聴きあうことが大切だと思います。対話は、「聴くこと」と「話すこと」がセットになっています。

【学生】人によって本文から要約として切り出す部分が違って、捉え方がたくさんあるのかなと思いました。

【ゲスト】いい気づきですね。ぜひもう一度この本を読み直してみてください。1回目よりも早く読めると思います。

【学生】要約の際個人の感覚で取捨選択されてしまうと思うのですが、これはよいのでしょうか。

【ゲスト】個人の価値観で要約していただいて構いません。意見を浅く広くしなくても大丈夫です。